



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「朱夏の女優黒木瞳のインド ④」

アーグラーと言え、なんといっても白亜のタージマハール（世界遺産）である。

シャー・ジャハーン帝が愛妃ムムターズ・マハール（1594～1631）を偲ぶために22年の歳月（18年説有り）をかけて建設（1632～1654）した。タージマハールは「宮廷の冠」を意味するが、宮殿ではなく墓廟である。

帝と愛妃は14名の子宝に恵まれた。遠征中15人目の出産のとき産褥熱のため38歳（1631年）で亡くなった。

ムムターズ妃の肖像画を見ると、いわゆる妖艶な美人には見えない。帝ならば後宮に多くの宮女がいたであろうが、これほど妻を愛した帝も珍しい。一步出陣すれば恐怖心やストレスがのしかかる。その帝を癒すことができるのは美貌ではなく賢明さである。あるときは慈母のように、あるとき良妻のように、またあるときは乙女のように振舞ったにちがいない。

ムムターズは臨終に際して、帝と次の約束をかわした。

- (1) 記念碑を建設すること。
- (2) 後妻を迎えないこと。
- (3) 子どもを大切にすること。
- (4) 命日に墓参りをすること。

シャー・ジャハーン帝は、約束を守りタージマハールを建設した。ムムターズが望んだ記念碑がどの程度のものか分からないが、とにかくシャー・ジャハーンは巨大な墓廟を建設した。それは愛の証か、あるいは愛別離苦のゆえか、はたまた愚帝の愚行なのか。とうとう建設費の増大をおそれた息子アウランガゼーブによって、アーグラー城に幽閉されてしまった。

世の妻たちが記念碑を建ててと遺言したら、世の夫たちにその甲斐性はあるであろうか。

世の夫たちは、遺言の前に問うかもしれない。「汝はムムターズであったか」と。

いずれにしても、われら家庭人には縁なき設問である。そのようなことに関わりなくタージマハールは、季節時間によってムムターズのように多彩な姿をみせている。いつでも美しいが、霧に覆われた幻想的なタージマハール、酷暑の燃えるタージマハールも素晴らしい。

かたせ梨乃が監督に訊ねた。

「監督、タージマホールを一目観たいけどダメですか」

監督は遊びに来ているのではない、とダメ出しをした。かたせの残念そうな表情をみて監督の心が揺れた。監督は女の泣きに弱い。外壁からなら良いだろうと折れることになった。

東外門から入って正門の手前に到ると廟の上部が見える。それだけでも美しい。

(これで満足ですか？ かたせさん)

「中に入りますか。監督に内緒で」

わが輩は彼女に小声で言った。かたせが嬉しそうに頷いた。

正門を入ると、かたせは全速力で廟まで走った。わが輩は正門に立ちその様を眺めていた。息せき切つて帰ってきた彼女が叫んだ。

「綺麗！やっぱり凄い！」

これはかたせとわが輩の秘密である。

宿泊したのはタージ・ビュー・ホテルである。当時はベストなホテルであった。

俳優特に女優は準備に大変である。早朝5時頃に起きてメイクをしなければ撮影に間に合わない。高級ホテルだが室内でドライヤーを使用するとショートして停電してしまう。わが輩はまだ夢の中にいるのに起されてしまった。ハウス・キーピングに連絡し修理係とかたせの部屋にはせ参じた。修理を終えて去ろうとすると、また停電してしまう。何度か停電して困ってしまった。それで化粧がおわるまでポーと突っ立っていたら、かたせが優しく言った。

「もう、帰っても良いですよ」

(そうだよね)

最近“通勤電車化粧”も平気な時代になったが、かつては品性ある女性が人前で化粧することはなかった。それなのに、ポーと女優さんの化粧を見ているなんて失礼な話である。

かたせは大学在学中からCMモデルをしていた。わが輩がかたせを意識したのはテレビの夜番組「11PM」を観たときからである。グラマラスな肢体で人気を博したが、実際は知性的な感じの女性であった。

ジャイプルのアンベール城に行ったとき、かたせがカメラのシャッターを押して欲しいというので二宮さよ子と一緒に写真を撮ってあげた。その返礼と言うわけではないが、わが輩と一緒に写真を撮ってくれた。

ところが、その写真がない。なぜなら、そのカメラは撮影クルーのもので、後日送ると言っていたのに、とうとう送ってこなかった。

思い出の写真が一枚消えてしまった。わが輩の「記憶」というカメラの中に一枚だけが残っている。それさえも、わが身体の消滅とともに消えてしまうのが世の常というものである。

シャー・ジャハーン帝とムムターズ妃の愛の象徴タージマホールが366年間も現存しているというのに。